

- 職種別による疲労 -

中村学園短大 石橋葉子 ・原栄子

目的 第4報では、縫製工場従業員の自覚的な疲労の感覚と、個別症状について、社会的条件や個人的条件など11の要因から検討をこゝろみ報告をした。この結果、経験年数や職種などは、作業前後の疲労感に差を生ずるという結果を得た。しかし、現場の従業員の条件が複雑であるので、別に条件を整備して実験を行い、検討した結果を報告する。

方法 1) 期日、1979年2月下旬の4日間 2) 被検者 20才の健康な成人女子16名
3) 測定調査項目、フリッカー値、大脳活動水準値、疲労感と自覚症状訴え率、4) 職種として「ミシン」「アイロン」「製函」「まつり」の4職種をえらんだ。5) 作業時間は60分、作業前後に測定調査を行った。

結果 フリッカー値は4職種とも作業後低下した。その低下の度合は、「まつり」が一番大きく、「ミシン」が僅少の差でこれにつづく、低下の少ないのは製函であつた。作業後の数字判別検査値は、「ミシン」「アイロン」「まつり」「製函」の順に低下が少なかつた。

作業後の疲労感と自覚症状訴え率は、「ミシン」がもつとも低く、「アイロン」「まつり」「製函」と高くなつた。検定の結果、各職種とも作業前後の要因には有意な差を生じた。